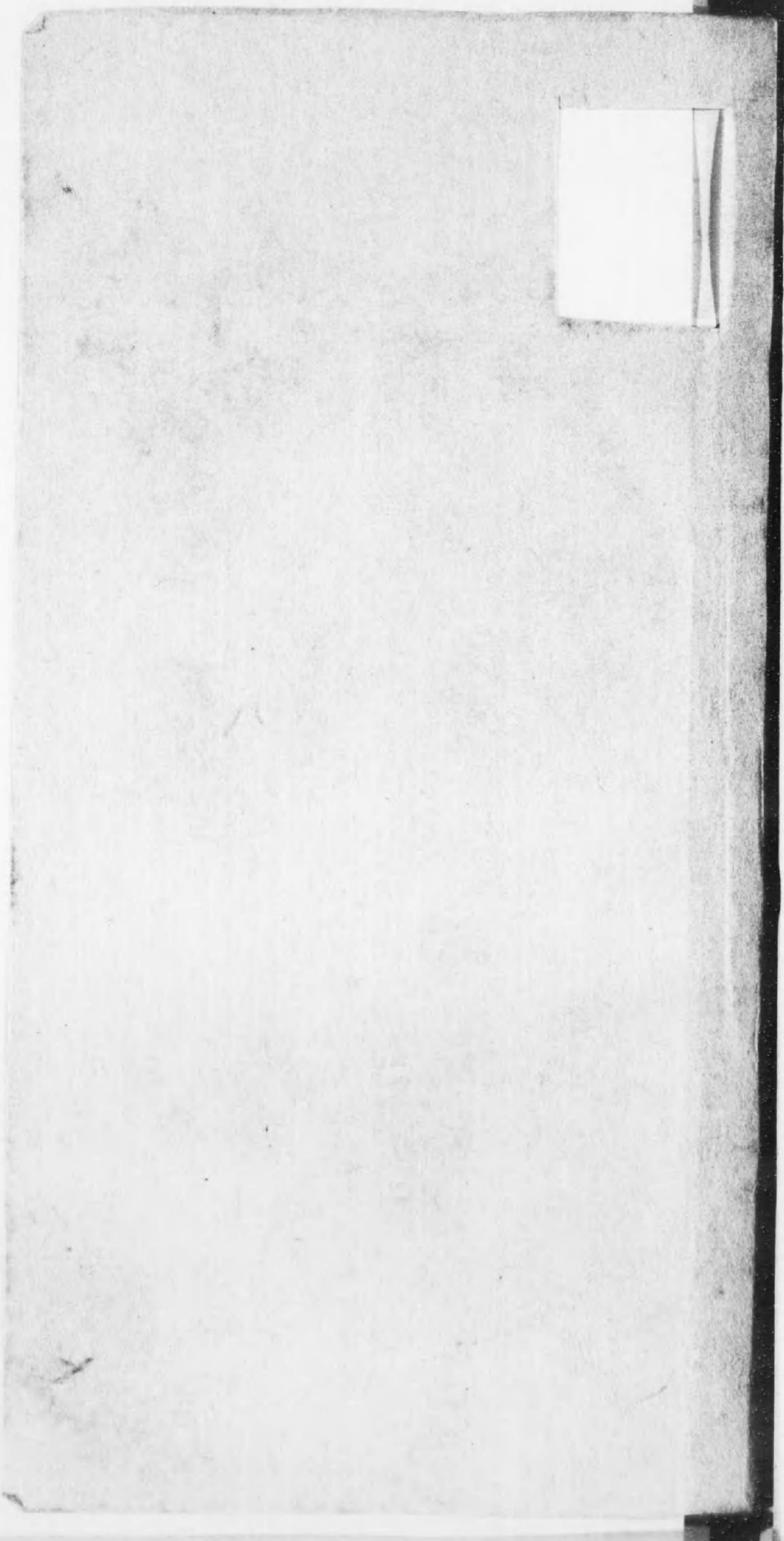


始



特 109

515

小
鳥

奥
川
夢
郎
作

3 4 1 1

特109

515

序

奥川君

君の歌集が出るといふ。おめでたい事である。君は才の人である。才の人の顯はれる事の多い今日、君の如きは、とくに大いに顯はるべきである。今まで顯はれなかつたのは嘘である。よろしく才人こゝに在り、われこゝに在りと絶叫すべしと思ふ。しかし自分は、今はこんな事を考へてゐる。それはす

によむべきものでなくつて、猶大いなるある他のものでよむべきである。その大いなるある他のものとは、全人格である。才などは末である。歌は自己のすべてを以て當るべきである。すなはち、自己の全人格を以てすべきである。しかもなほ満身の力を籠むべきである。決して手輕にちよいくと伶俐にやつてのけるべきものではない、と云ふ事である。

この事は、多分君も賛成であらうと思ふ。しかし世の中には、賛成はしても實行の出来ないものか多々ある。自分は殆んど日々それに出逢ふ。この感はまた君にもあ

るであらうと思ふ。が讀つて考へて見ると、君は満身みな才である。従つて君の全人格は、乃ち才そのものである。いはゆる發刺たる才は君そのものゝ姿である、形である。さうしてみると、君の歌は、乃ち、君の全人格を以てしたものである。君の總てを以て當つたものである。かう云つて來ると思はず自分の考と君の歌とば一致したわけである。契合点を見出したのである。自分はこゝに、改めて君の歌集の出るのを祝さなければならぬ。

三月廿五日

柴舟生

小川の水がくるくと

水車を廻す

くるくと

昨日も

今日も

くるくと

一度廻したその水は

流れながれて返りやせぬ

たゞ一夜ふりし雨にもめぐむとか名知らぬ草
も春はなつかし

春たてどかなしみふかし八重櫻ちりくる窓に
人をおもへば

泣けばまた落ちしなみだのいづ一いづ々におもひぞ浮
ぶかほもなさけも

悲しみは月のいろにもいやまさるときをり音
もなくちるさくら

2

泣き顔を傘にかくしてかへりゆくその傘にふ
る春のあは雪

春の戸をほそめにあけて花ちると告げゝる人
の髪にほふかな

春の夜のたはむれこゝろうたゝねの女の顔に
墨ぬらまほし

櫻さく春のあはれは夕月のほのかにさせる水
のおもてか

花のちる音も枕にかよふかとしづけき夜をゐ
ねずありけり

3

そもたれに詫ふる涙ぞ夜となればひえくくと
頬に流るゝなみだ

4

春の夜や壁にはられし繪の女あたかもわれを
まもれるごとし

風ふけばあはたゞしうもまひ落つる花ひとひ
らにおもひすはるゝ

思ひいづ紅べにの椿つばきの落花おちにわかれし人の髪かざ
りなど

暗縁の葉にまじりさく紅椿けふも小鳥がきて
つ**い**ばめり

葉のおもてほこり見ゆるもうらさびしひとき
わあかき垣の椿の

5

かろらかにほこぶ女のあしどりをまねてもみ
たき春のくさ原

讚美歌のひとふしがふと浮びきぬ草にねて空
の雲をながむる

教會に通ふ女のつゝましき姿かなしも春のゆ
ふべは

校舎の裏靴もてかきし人の名の上につばきの
おちてあるらむ

春の月飲みすてゝさし盃の酒のいろよりなつ
かしきかな

戸をとさしまたこの部屋にひとりねむ外面そとは
春の雨しづかなり

はら／＼と戶外にあられ降り出でぬ夢よりさ
めて君おもふころ

8

庭下駄のまゝにていつも送り來し橋のたもと
の山さくららばな

いますこし歩みゆるめて給へよと白蓮華なご
つみてありけり

草や木のかろきそよぎもこゝろよしつかれて
くさに身をしなぐれば

足をとにおどろかさされて頬の涙ぬぐへどさび
し汝の前髪

泣き顔が硝子障子にうつるよと云へばさびし
くほゝ笑みしかな

9

末の子が妻をもつまで永らへむ母の言葉のそ
のたよりなさ

10

鳥等みな歌へりあをき空をみてその空の下に
われら悲しむ

青といふたゞ青といふいろにのみ眼の馴らさ
れて六月に入る

顔見らるゝがはづかしいとてうしろむき紀伊
の國など弾きたる少女

手とらむとすればさびしく眼をふせぬ夜更け
し部屋の黄なる電燈

火の山の麓の女けふもまた山鳴りなどをおび
えてあらむ

吸殻をつとなげすて、馳けいでぬあまり心の
さびしきまゝに

12

君よりもなほ美しくしき子のあるがはらたゞし
さに憎しみもする

酔いてねてまたおきてのむ酒の味舌にしみる
がうらかなしかり

□

ひとつきにみたぬ旅ゆへさばかりにつれなく
われを旅立たせしか

落人おちひとのこゝろかわれら東京をふりかへりつゝ
旅に出でけり

13

悠然と浪にたゞよふたゞ一羽鷗一羽にまつは
るうれひ

つとすぎしかもめ一羽をみ送れる眼がまたい
つか君を描けり

しらずく海を見る眼がなみだぐむなみだぐ
みつゝ顔をあげえず

かりそめに手とりし女の住む港船はさびしく
汽笛かならしけり

わが船がならず汽笛きのかすかにも港の山にき
ゆるかなしさ

船につかれ君を思ふにつかれたるこの身いつ
しかねむりけるかな

泣きてあらむ白きうしどにうすあをくうつる
青葉のそよぎにさへも

16

夕ざればかへりくるてふ小鳥よりあはれや男
酔いてかへりぬ

針の手をどめて語りし君が眼のうるめるがこ
とに悲しかりけり

八月の風の流れのめにいたし君を泣かせて海
に來し夜の

□

大方の木の葉がちりし林間に日^ひ光をあびてあ
るこゝろよさかな

17

なげ出せし足のあたりをちよろちよると舌だ
してゆく蛇のおかしさ

18

生き甲斐のあらぬ男が生くるこそあさましか
らむみにくかるらむ

あゝ母が生きてあらばと涙ぐむいたいけの子
にまたも涙す

來しかたはあまり涙にもろかりきもろかりき
とて泣くたわけ者

わが死骸あざける顔のその中に汝が美しきか
ほもまぢらむ

死にもえぬをどこが歩むうしろより笑ふ女か
汝はさびしや

19

死を思ひおのゝきながらめをとぢぬとぢしま
なごに浮ぶ顔かな

20

風明きあけがたどきを鳴きいづる秋の蟬こそ
かなしかりけれ

秋くれば海の女も悲しまむ濱なでしこの伏し
てなげゝば

つれなくも別れ歸へればほのくらき部屋の障
子にこほろぎの鳴く

尾の赤きとんぼがきてはよくとまる水引の花
もちりをはりけり

ゆるやかに去りし列車のあの窓がまた思出の
たねとなるらむ——以下飯田町驛に人を送りて——

22

人が見なば怪しくわれをおもふらむおもふら
むとて泣かず別れぬ

いたましくゆられて通るとんねるの暗さにま
たも泣きてやあらむ

東京をよけい戀しく思ふらむ甲斐の山々雪見
えくれば

□

釣りなれし蚊帳をはづしてゐねし朝秋がしみ
じみ泣かれぬるかな

23

枕よりしづかに顔をあげてみぬ悲しき夢をし
げく見し朝

24

やうくは秋はさびしくせまりきぬ野より山
より日の光りより

すゝきの葉白う光るをみてあればこのさびし
さのやりどころなし

にくらしきままでにかはゆきその瞳ひこみいつか他人
へものをいふらむ

あたゝかき女の愛に死なむことこのころ切に
かなしうなりぬ

かの月が空のなかばにさゆるころ野の虫ども
はいかに歎かむ

25

泣き顔をかくして歸へる子はさびし雪駄の音
さへひそめてかへる

26

氣まぐれに手とる男と氣まぐれにゆるす女と
はつ秋に入る

別れ來し女の顔の肉付きをおもふこのごろ白
日紅咲く

明方をめざめてあればうらさびし夢のやうに
も風ながれくる

うらがなし夜の女が夜になれし眼の衰へて新
秋に入る

わがかへるうしろ姿のおかしきか君ひそやか
にゑみたまふかな

27

逝く夏がのこしをきたる秋の蟬なかねばさび
しゆふぐれの木々

28

つゝがなく秋をくらすと書きて來し女の身な
ど思ふゆふぐれ

屠牛場の裏の渚のなでしこがなせかこのころ
思はるゝかな

よく泣きし男とばかり汝が胸にとゞめよさら
ば悔ゆることなし

口答へどまでは云はねどその母に逆ふ子をば
うとみそめてき

あまりにもしづかなる顔ものさびし心を君に
なげてみしとき

29

いつになくまじめに語る女のめやうるめる
がたのもしいかな 30

薄 倅

—一九三〇—
全 七 —

露のなさけに
なほ白ろ白ろと
咲いてうれしい夕顔も
明方までの短か夜の
命ときけば
しほらしや。
散つてゆく身の
いぢらしや。

逢はぬまにいつか椿もちりはてぬをんながす
きしあかき花びら

汝が縫ひし袴の襷積ひだもくづれきぬまたあはむ
日のよろこびもなし

かつてわがとりしその手は汝となが涙ぬぐひ
てあらむこのごろ

離れたる一人はさびし六月のあをき風にもな
みだぐまるゝ

34

汝が縫ひし單衣の袖のほころびをわがぬへば
母はわらひたまへり

おそるく君くちづけを許せし日その日すて
むとおもひたちしや

いまもなほ御身が帯の模様さへあざやかにわ
が眼にはのこれり

人が聞かばすてゝ來しとも云ひたまへそれも
女のほこりとならば

うすあかき夜のこずゑをわたりくる青き風に
もこゝろなかるゝ

35

砂濱へ泣きにゆく日もちかづきぬ一人となり
し初めての夏

36

白き花咲けどあきつのとびくれど去りし女の
消息はなし

御身はやみにくきわれの泣き顔を忘れてあら
む月見草咲く

たわけもの袂の錢をすりとられ茫然として歸
り來しかな

□

くげぬまに君やひとりの生活のあぢきなさな
どかこちてあらむ——以下愛妻を失ひし書家K氏に——

37

ひとりゆへひとりゆへまたすぎざりし幸を思
ふことしきりなるらむ

38

筆とれば繪絹に妻の顔見ゆと聞きて悲しく君
をおもひき

いまだ眼に昨日きのこのごとくも浮ぶらむ妻が臨終
の白き顔など

いつしらず落ちし涙ぞ尊けれ妻に逝かれし君
をおもひて

思出の一つ一つに生くること君もかなしくお
もひつるらむ

月清し妻に逝かれし若人の涙ひとしほうつく
しからむ——以上——

39

夕ざれば汝とあゆみし灯の町にはや夏草のか
ざられてあり

□

わがかほをぬすみ見てゆく女ありかはほりの
とふ街はさびしや

泣きにくる女あらねばこの部屋も静に夏とか
となりけるかな

消息もなくてわれらが別れすむ郊外の空に鳴
きかふつばめ

汝が部屋の瓦斯のあかりのあかるさにまたさ
りげなくかへりきにけり

わが部屋もとりみだされしまゝにあり女來ぬ
日のつゞく此頃

一語さへわれに與へず君去にし五月の夜はか
なしかりけり

われふたゝび君に逢ふまじおとすまじ尊かる
べき男のなみだ

月草と砂丘

一九二七
全八

暮れてゆく
空をいろどる雲のやう

かもめの夢のそれよりも

淡い戀路の行く末に

咲いて淋しい月見草。

かりそめのことさへあはれ浮びきぬ別れしま
ゝに海に來し夜

海ひとつ隔てゝあればなごむかところ、にきて
また悲しむころ

海の宿一夜はかなし旅人を泣かせていつか明
けにけるかな

逢引の夜のごとくもこの心おだやかならず海
にきにけり

しづやかにあをめる水のみな底の藻草ぞこひ
し身を投ぐべきか

はつきりと相模の山の見ゆる朝めづらしくわ
が心なごみぬ

力なく白砂になげしこのからだ鳥も食ふまじ
浪もさらはじ

寄せては返へす浪にもいつかなぐさますます
砂山を越えて歸へりぬ

朝の海かもめ一羽のひるがへりひるかへりよ
りしづかなるかな

きまぐれに一人ひとりを愛しゆくこゝろかと
思ひ涙ぐみけり

48

さらさらと髪を梳くさへ悲しからむはしなく
われを夢見し朝など

ゆるやかにしづかに船が見えずなる港はこひ
し相模なるべし

いつとなくつめたき涙頬をつたふ薄暮の濱を
ひとり歩ゆめば

暮の海墓のやうにも山見ゆる相模の國のうす
らあかりに

眼は海を心は君をみつめけりしづかにふくる
夜の砂丘に

49

風涼し濱防風のあかき根をひとりさびしくほ
りてみるかな

50

とある朝砂に見出でしさし櫛をすてかねしま
まもちにかへりぬ

渺茫とかすめる彼方一沫のけむりのごとき相
模はかなし

なにごとか悲しきことのあるならむまたもか
もめがむれて啼き出ぬ

いつのまにかしぼみはてたる晝顔をそのまゝ
もちて歩む草原

すいと飛びしちさきあきつの影にさへおごろ
かさねぬ砂山の夢

51

晝もなく渚の草のきりぎりすとらへてかへる
海近き家

52

ありし日の人の情なさけのいや悲ししづかに暮るゝ
海にかへば

あゝ歸へらばまた悲しみがよみがへるべしす
こやかに彼れが住める東京

水とそらそのつらなりに消えてゆく一羽の鳥
の戀しかりけり

浪打際をいくたびゆきつもどりけむひとつの
歌をくり返へしつゝ

うすくらく雲の影さす海の面をみつめつかれ
し眼のなみだかな

53

砂山に泣ける男と露草をしづかになでゝゆく
海の風

54

夜の渚わがおもみゆく砂山の砂のくづれのさ
びしかりけり

さらくくと葦の葉は擦すのかよひくる川岸の家に
くみし酒かな

蚊を焼くと女が持てる白蠟の灯のおのゝきに
ふけてゆく夜

明方の海の遠音のこゝろよし宵のまゝにも人
静かなり

別れしをおもふ心にいつとなくかるきうらみ
のふくまれてきぬ

55

おとなしく君を戀ひけるそのころの涙こひし
も海にきぬれば

つかれたる身をよこたへしかたはらに一本ひとな
ればいとしや月草

あきつ

—一九三。九
全 十—

夢さへも

ゆれてゐるだらう

ゆらゆらと

秋を知つてか知らいでか

たゞひともとの秋草に

じつとまつてゐるあきつ。

やゝとけし帯をなをせる両の手をながめてあ
ればそつと笑ひき

眼をふせて膝のちりなどはらひゐぬそのひと
ときの部屋のしづけさ

待てばなほさびしや夜のうすあかり秋の櫻が
ひるかへりちる

ほろゝさむき風にちりゆく秋櫻かへり咲くさ
へかなしきさくら

60

日向ぼこあきつの尾しっぽに文がらを結びつけなど
しつゝ遊びき

草にねて飛べるあきつの両翹の黄にかゝやく
をよろこびしかな

手をやればすいと逃げゆくあかあきつ赤き尾
にこそ秋のほの見ゆ

こゝろもち風にゆらげる草の穂にとまりえず
して飛べるやあきつ

捕えぬし指をはなてばはるかなる空に消えゆ
くあきつはかなし

61

再びは返へりくるまじわが女あきつにまして
あはれみふかし

62

□

風ふけば君をなかせしかの森の高き梢がしの
ばるゝかな

わが嘆きにかゝわりもなく汝やがて母となる
べし春ともならば

やがて母となるべき汝が夢見るはこの泣き顔
か美^{うま}しき嬰^{わが}兒^こか

あなあやし汝が母となる日をかぞへつゝふと
しも指に落せしなみだ

63

やすらげき生活のみを願ふらむ母となるべき
かのひとづまは

64

ひとづまのうすき記憶にのこるをばせめても
われの幸とせむ
さびしからむ夫つまのなさけにうらぎりて別れし
人を思ひいづるは

謎のごとくなげて嫁きける汝が心解しえてま
たも悲しみふかし

この膝にいく日を泣きし汝が加ほさびしかる
べし母となるころ

深みゆく秋はさすがにさびしからむ夫の情の
いやあつくとも

65

あゝさびし侘びてきつれどひとづまはくちす
ふすべもわすれはてけり

寂しければ

——九二五——

脊なかにほつたほりもの
命といふ字に血がにじむ。

雪ふる夜のくるわ町

更けてつもつた雪さへも

あだぢやなかなか

とけやせぬ。

残されしひとりの涙かわかぬに妻となりなき
母となりなき

たわけ者をんな心の薄情をまたくりかへし泣
きにけるかな

忘らるゝ身とし思へばみづからの命かわゆく
なりにけるかな

失ひしこひのなげきのうすらくになんの涙
ぞ今宵おつるは

□

くちづけをゆるしてしばしめをふせぬ外面の
かせのふとやみしとき

氣まぐれに君やゆるせしくちづけか一人とな
りし男をゝるに

汝が歸へるかの海岸の松林松かさしげくおち
てあるらむ

さゝやかなことさへ人の噂する街へ歸へらば
かなしかるらむ

ゆくりなく逢へど二人はいとうすき情のまゝ
に別れけるかな

□

いつの日にわがよろこびのしるされむ思へば
かなしこの日記はも

日記さへかゝずなりけり哀愁のさらねばペン
をとるもものうし

すさびゆく心のかげをとゞめむと求めさしか
や小さき日記

この日記しるさばまたものちの日に必ず悔ゆ
ること多からむ

焼きすてゝしまはむと思ひとり出せし日記ひ
さしくそのまゝにあり

一昨日も昨日も逢ひてゐしごとくすねて泣く
子はやゝ憎きかな

五六日同じ電車にのりあひし人々の面をふと
思ひ出でけり

うら悲し戀の終りと名づくべき日もあらなく
にあはずなりけり

しんくと雪ふりくればひとづまの針もつ指
のつめたかるらむ

この夜ぞる父母の命の老いゆくを身にしみじ
みとかなしみにけり

酔うてゐるくるわの雪のおもしろやしらぬ遊
女に手招かれけり

なせかふと泣きたくなりぬ雪の夜の遊女がさ
りし部屋のかた隅

酔さめて口を噤める旅人はあはれ遊女にわら
はれにけり

そつとまたくるわを出でぬそのかみの驚きや
すき少年のどと

遊女屋の柱鏡にうつりしは他人のかほぞとお
もふさびしさ

旅人はいづるくるわのあさあけに雪のしろさ
にさしぐみにけり

□

酒と女おもふもいとさびしからむ牧水が昔
すみし二階に——二首穂草に——

ふるさとのきよ子がこともたれやらのことも
やうやく忘れたりしか

夜の窓

——一九三。四。——

壁にはられし浮世繪の
女の瞳こそ

悲しけれ。

夜はことさら――

じつとわたしをみつめてる

ものゝあはれは櫻ちる

夜と

描かれた女の瞳。

ひとりすむ部屋にも春はきたるらし窓に入り

くる日光ひのやはらかさ

人待ちし心かなしくよみかへるひなたぼこし

て眼とちてあれば

ひとりとなりしわが生活のなつかしき窓にも

たれて思ひ悲しむ

見なれたるこの窓よりの草や木にまたあたらしくなみだをそゝぐ

82

一度ならず二度ならず汝が誓ひしはかゝる別離わかの裏言うらごなりしか

別れては汝が愛のかなしくもいつわりのことくよみかへるかな

若ければ君や男の愛着をいとすげなくもすててさりしか

この窓に泣きし汝が銘仙の羽織のいろもやゝあせにけむ

わが窓に月のあをめる夜ごろにも汝つゝましく針やはこばむ

83

馬鹿馬鹿とこの身みづからあざければかなし
やいつか涙おぼえぬ

84

あたらしく電氣の球を買ひて來しその夜ひそ
かに書讀みにけり

朝な夕なかならず見ねばならぬものまづ老い
きたる父母の顔なり

逢ひしこと君も悔ゆべしそのゝちの戀しさし
げく胸にせまれば

一杯の酒にいたくも酔ひしれてうたへば悲し
君こひし歌

ときたまに思ひ出しては泣くことを心ならず
もなれてきしかな

85

眼さむれば悲しやわれとわが指をつゝまじや
かにくみてありけり

86

さくら咲く春のうれへのやりどころ酔ひさめ
ざわに涙してけり

あきらめのあとより起るさびしさにまたうら
ざりて思ひつゞくる

そとわれとわが名をよべばあなわびし人の呼
びにし聲のごとくに

そこひなきこの悲しみのやりどころもとめ歩
ゆみて遂に死ぬべし

しのびかに歩ゆめばかなしごむざうり人の足
音をふとおもひいづ

87

木々の葉のいまだそろはぬ林間に浮び出でた
る月ぞさびしき

28

このうれひとけて流れよ一葉さへそよかぬ木
木にふれる月光

悲しみの去るときをたゞ待てといふ友の言葉
のいやさびしかり

病みふせるしろき肌はこの夜のこの淋しさは
いかにしむらむ

子守唄うたひつかれて涙ぐむ若き母ぞとゆる
したりしか

わがまどに白くふるへる夜の霧にまたしのば
るゝ人の寝姿

89

月光はあかるく窓に
いりくるをとさして
われ
ら語らひしかな

眼をとぢてよれば
なづかし夜の窓霧の
なかに
も汝がかほ見ゆ

旅 人

おち葉する

水曾路信濃路たゞ一人

わたしや歩いて行つてみたい。

灰をふらすと聞いてゐる

淺間の山の秋のくれ

絶えぬ煙りとわたしの思ひ

「あつて見たい」の願ひさへ

旅ぢやたよりが無いわいな。

わが歸京指をりてまつ人もなし停車場にそと

なみだをぬぐふ

切符買ひしあとの残りをかぞへつゝ入りし列

車の人々のかほ

めもはるに海見えくれば旅人はおどろきて窓
に顔をよせけり

驛の名のしるされてある白き札いくつへにけ
む旅は悲しも

水と空おなじいろしてうすがすむ夜の濱名湖
をいますぐるなり

やがて夜はしらみゆくらむわが前の女さびし
く窓外まどを見てあり

眼「鏡」などいだして母の見給はむ子が旅よりの
この繪はがきを

留守の間に日記を見なばいまさらに母はわが
子をかなしみたまはむ

旅人はぬれて入りぬる停車場の更けし灯ともしにま
づなきにけり

山國の秋を泣くべく出で來しか窓より見ゆる
雲もさびしや

96

旅人のみが知る悲しさか山國の夜の街をゆけ
はなみだおぼゆる

この旅のついでの日なみだに湧くなみだには君の情なみだも
輝きぬらむ

旅人の夢にな入りそ別れたる人の情もそのお
もさしも

別れたりそのあきらめのいやつよくかなしく
なりぬ旅にいづれば

誰れよりもまづ歸へる日を告げりと旅にき
てまた人を思へり

97

水深み死骸も人に見えざらめさしぐみつゝも
わたりし谷川

98

風くれば尺より長き秋草のなびきて暮るゝ木
曾の山山

わが嘆き知るや秋草さらくゝと風になびきて
悲しみあへり

京の町歩めばかなし美しき人形あまたならべ
てあれど

召しませとすゝめられたる京人形桃割一つ買
ひてきにけり

われちつとして人を思へり兄と姉かろくいさ
かふそのかたはらに

99

少なき鬘もすらざりければのびにけり旅にあ
る身のうらやすさかな

涙出でぬせめてかたちの變るやう髪のはさむ
と思ひけるとき

君を得てしりし涙は末途にわが身ひとつにそ
そがれにけり

雨ふれごこほろぎはなけり病みふせるわが床
下に今日も昨日も

檢温器腕にはさみてある間こほろぎに心うば
はれてゐたりき

やうやくに病いゆころほそぐとこほろぎの
音もうすらぎてけり

小さき驛下りてあゆめばぼけつとのわづかな
銭がちやらくとなる

102

何鳥ぞ秋の木立にきくとなくつとわが汽車が
入りしやまあひ

しらぐと夜があくるころやうやくにとなり
の人と口をきりけり

冬にいる木々の姿ぞかなしけれ愛着の涙すて
えぬ睡まに

うらがなし山も木立も涙せと霧につまられわ
れにむかへり

わが顔をいぶかしげにも見て立てる踏切番の
小娘の帯

103

暮せまる木曾路の山のうらさびし焼けしちの
葉のまばらなるさへ

旅人がやうやくあげし憂ひ顔峽かよりみゆる空
あをかりき

いつのまにかこほろぎは鳴かずなりにけり旅
に疲れて歸へり來し家

欠

欠

二人して君をたづねしきさ二月らまはことになみだの
しげかりしかな

言葉ふととぎれければ三人はいちやうに外の
風をきゝけり

おとなしくわが膝にゐてねむりける君が愛兒
もさびしかりしか

泣き給ふなといたはりくれしかの門の紅椿こ
そかなしかりけり

酌みくれし赤酒の酔のさめやらぬ頬につめた
き月光なりしかな

彼女おもふころぞあはれをりくは汝が言
葉さへ裏切りしかな

月あかりつばきの花のあかければことにさび
しく歸へり來しかな

いまさらに君やかなしくおもふらむ同じ嘆き
にあるとし聞かば

君ふたゝびわれになとひそかの頃のやさしか
りにし心のなげき

□

雪の夜の街はうつくし懐中に空の財布があた
たまりをり

ともすればころばむとする雪の道酒が笑へり
ころべころべと

今宵ゆくとをんなにかけし自動電話受話器の
鉄のつめたかりけり

しとやかに入りきし人ぞさびしけれ肩に粉雪
のきえあへぬさへ

雪はげしと云ひつゝ笑みてとりあげし象牙の
撥はつめたかるらむ

軒の雪どさりと地におちたればこゝろしきりに
かなしみてあり

118

歌へと云へば壁にもたれて爪弾きす淋しかり
けり夜半のみぞれは

しもやけにやめるおゆびのむづかゆさ君が心
にみいでけるかな

二月ふたつきの午後ごごのひさしにしたしみてとりだす手
紙みのかずもかなしや

嘆くまじ春のゆくへとともぐに消えてし戀
のはかなかりしは

ふたつほど年下の子に雑誌など買ひてもらひ
き春の夜の町

119

戀人はさびしきものぞたはむれに殺すと云へば眼をとぢてあり

くちづけをせし唇に櫛の齒をあて、たくみに髪を梳きけり

垣の外をあゆむ女のきぬずれの音にも春はみえてなつかし

□

水のやうに澄みきつた幼い心に浮ぶ雲のかげ、それにも詩人は靜かに自己の影をうつしてみる事を忘れない、かすかなさゝなきに我身の運命を歌つてゐる小鳥の聲にも熱い、同情の涙を灌く事を忘れない、そこに詩人の淋しい、しかしながらやさしい心根がひそんでゐる。今「小鳥」一篇を見るに及んで、更にその感を深かうするものがある。

小鳥！　なんと云ふやさしい名であらう。私の友人の中でも一等やはらかい。純な感情を有つてゐる君の歌集の名として、これ以上に適當な名が世界に又とあらうかどうかぞ此心をわすれずに、いつまでもく歌ひつゞけていかせたい。私のやうなヒネクレた眼を以てゐる、人生の淋しさ、悲しさのみを追及してゐる様な生きやうをしてゐるものは、それが羨ましくつてならない。妬ましくつてならない。

奥川君、怎うしたら、私のこの固い心が丁度淡雪のきえていくやうに解け、人生の花やかさに選り逅ふ事が出

来るでせう？

大正初三の春

あるところにて

たねとみ

□

春風秋雨、吹いては風ぎ、降つては曇れる。僕と君とのつきあひは、もう随分古いものだ。

だけそれだけ僕は可成君に對する色々な智恵を持つてゐる、それ、あの事も——あの事も——
けれども考へて見ればそれらは皆つまらない記憶だ、もう好い加減にしてお互に忘れたい。

君のこの歌集は皆それらの忘るべき若き日の手記である。君よ、君を知る僕は又よく君の歌を知つてゐる。

知つてゐるだけ、こゝして君が集にして出すのを此上ないよるこびとする。

君、奥川君。そうして、われくはもう永遠に、若い日と別れ去らう。

講談社編輯局にて

尾 張 穂 草

三月

卷末に

古い日記をとり出してみると、その頃の自分の心持ちも姿も、あり／＼と眼の前に浮んできます。読んでゆくうち、その頃の自分が可笑しかつたり、馬鹿／＼しかつたり、亦なんだか妙にあはれつぽく思はれたりすることなどがあります。さう云ふ時には何時も黙って泣きたいやうな気分になるんです。だがそれにはみんな、あるなつかしみが含まれてゐます。つまり自分の歩いてきた道

をふり返へつて見るといふことは、いやなやうななつかしいやうな氣がいたします。

その日記のやうに私の歌は私の生活の破片であり陰影であると言ひたいのです。少なくとも自分にとつて、この拙い歌のかす／＼は實に挽回すべからざる過去の涙であり、喜びなのです。

云はゞ自分の刹那／＼の醜い影を一所に集めて、過去の自分と現在の自分とのきづなを絶ち切つてしまいたい

のです。さうして又新しい生活に入り新しい道を進んでゆきたいのです。

これが私の歌です。と他人の前に出すにはあまりにつまらない歌だと思つてゐます。

自分はこのごろ歌が出来なくなつてきた。かう自分の心に吐いた時急に軽い驚きと悲しみとを覚えまして。これも歌を集めて置かうと思つた原因の一つなのであります。

此の編輯に私はかなり苦心をいたしました。それは外でもありません、歌の取捨なのです。他人が見てはほんとはくだらない歌でも自分にはすてかたいものもあります。さう云ふものは出来るだけ入れておくことにしました。

配列の順序は古い歌を先きにしました。だから巻首の方の歌はとりわけ幼稚な拙劣な歌が多いのです。

このみすぼらしい歌集の爲めに尾上さんは序文を下さ

いたしましたし、尾張君金澤君は跋を書いて下さつたし、野口君は私の我儘な要求を入れて装幀をして下さいました。その御芳志を有難く深謝いたします。

それから出版について多大の御盡力をたまはつた長山君、又印刷所の塚田、糸井氏に厚く御禮を申し上げます。

春がきました。私の窓側の紅椿も櫻もほころびかけてきました。さびしいこの心も祝福されるやうな気がいたします。

枝から枝へ、春を歌ひ乍ら自由に飛んでゐる小鳥。その歌のやうに、なんのわけもなく咏みきたつた自分の小さい歌の校正をしてゐると、いろ／＼なことが胸に描かれてきます。

悔いと嘆きのない日を送りたい。これが今の私の願ひなのです。

胸込にて

著

者

大正三年春三月二十七日

大正三年三月卅一日印刷

大正三年四月十日發行

著者權所有

—定價五拾錢—

著者 奧川辰雄

發行者 伴竹次郎

印刷者 塚田政一

印刷所 永井印刷所

發行所 東京市神田區
裏神保町二番地 近代社

東京市神田區裏神保町二番地

東京市小石川區西九町八番地

近刊豫告

長山秋郎氏著 江馬春吉氏裝幀

詩集

若き日

著者は美しい詩を作る若い詩人。
未だ發表しない自信ある作品を
集めたもの。
敢て若き人々の机上にすゝむ。

——五月中旬發賣——

發行所
近代社

モウパッサン著
栗津晴嵐譯

女の一生
フィラ・ス・マーウ

「女の一生」は實にモウパッサンの長篇中この右に出づるもの、ない位の作品である。
やるせない人間の本能を現はして忌憚なく、其の筆法は最も大膽。
青春の血漲る人はこの書を読んで如何に胸躍るであらう。
眞嚴な意味に於ける戀愛と性慾の傑作である。

——定價五十錢郵稅六錢——

UNE VIE

發行所
近代社

告 豫 刊 近

著 氏 郎 夢 川 奥
集 劇 女 少

頃 く 咲 椿

幀 装 氏 夫 証 口 野

□この少女劇集の中には昨春
お伽劇協會の東花枝、萩芳
子、服部省介、川原履信氏
等が演じて好評を博した少
女劇が入つてゐます。
□女学校の餘興にでも出来る
やうな眞面目な面白い脚本
です。
□カチノ山や桃太郎と全く
趣を異にした新らしいお伽
劇集です。

賣 發 旬 上 月 四

社 代 近

終

